

インターンとして

松永圭造ウィリアム

2018年秋ごろから2019年1月までJFCネットワーク東京オフィスにてインターンをしておりまして、松永圭造ウィリアムです。

私は埼玉県内の大学に通う大学3年生です。現在、休学中で、休学した理由はいくつかありますが、自分探し、そして似た境遇の人たちのことについて学ぶ1年にしようと思ったことが理由の一つです。インターンに応募した動機も同様の理由です。私はブラジル人の父と日本人の母の間に生まれました。一般的にいうところの「ハーフ」で、目鼻立ちも一般的に想像する「日本人」とは少しずれているかもしれません。生まれも育ちも日本です。そのため、父の第一言語であるポルトガル語を話すことがほとんどできません。幼いころから「日本人」として生きてきた私としては、時には自分の容姿が友人と違うことを嫌ったこともありました。自分は日本人であるはずなのに、他人はそう見てくれない。アイデンティティと容姿のギャップが存在しました。私は日本社会においてマイノリティであると自覚しました。しかし、JFCの子たちの中には、さらに複雑な環境で育つ子が多いことを知りました。自分と似た経験をしていると勝手に思っていたのですが、複雑な家庭環境、そしてなかには日本国籍をもっていない子もいると知りました。

日本生まれで、日本国籍を持ち、日本語が話せ、日本文化に慣れている自分と、フィリピン生まれのJFCの子たち。その子たちが自分のもう一つのルーツを辿るように日本にやってきます。学校でうまく馴染めなかったり、日本語に苦労している姿もみてきました。何度も手紙を出しても返信が来ない父親に、その子と一緒に会いに行く機会もありました。最終的に会うことができましたが、その際も通訳がいないと会話が難しい様子でした。

一つの枠組みとして私もJFCの子らも「ハーフ」とくることができるとは思いません。しかし、その「ハーフ」のなかでも、日本社会に限って言えば、私はマイノリティの中のマジョリティであることを初めてちゃんと理解しました。その時、マイノリティとしてのスティグマを背負ってきて、ただふさぎ込んでいた過去の自分を反省し、自分にできることをしようと思うようになりました。

JFCの子たちの自分のルーツに対する思い、日本にやってきて今の自分にできることを一生懸命にしている姿にすごく心を打たれました。こうした姿を私も見習い、一人の人間として自分の姿を見て少しでも相手に変化を与えられるように、胸を張って生きようと思っています。